

古典解釈シリーズ

土佐日記 かげろふ日記
紫式部日記 更級日記 の研究

関根慶子 著
丸山キヨ子
伴 久 美

文 績

土佐日記 かげろふ日記 紫式部日記 更級日記の研究

お茶の水大教授・文 博
関 根 慶 子
東京女子大学助教授
丸 山 キ ヨ 子
実践女子大学助教授
伴 久 美
共 著

古典解釈シリーズ

績 文 堂

著 者 紹 介

関根 慶子 明治42年東京都生。昭和14年東京文理科大学国語国文学科を卒業。現在お茶の水女子大学教授。文学博士。平安時代文学専攻。著書に「散木奇歌集の研究と校本」「校註国文学更級日記」などがある。

現住所 東京都練馬区中村南3〜7

丸山 キヨ子 大正4年甲府市生。昭和22年東北大学文学部文学科を卒業。現在東京女子大学助教授。平安時代文学専攻。主要論文に「源氏物語と長恨歌」「源氏物語と中国文学」「長恨歌から見た白氏文集の系統」などがある。現住所 東京都武蔵野市吉祥寺 500

伴 久美 大正10年東京都生。昭和22年東北大学文学部文学科を卒業。現在実践女子大学助教授。国語学専攻。主要論文に「平安朝に於ける『のみ』と『ばかり』について」「枕草子の副詞の一二について」などがある。

現住所 東京都文京区駒込林町 195

古典解釈シリーズ

土佐日記 かげろふ日記 の研究
紫式部日記 更級日記

定 価 円 390.

昭和34年11月30日 初版第1刷発行

昭和40年10月30日 初版第4刷発行

著 者

関根 慶子
丸山 キヨ子
伴 久美

発 行 者

石 上 昭

印 刷 者

高 橋 武 夫

発 行 所 株式会社 績 文 堂

東京都新宿区山吹町81番地
振替東京126073 電話東京(260) 3475

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

大日本印刷・協栄製本

は し が き

平安時代の日記文学は、日本の文学史の上に新しいジャンルを創設したものとしてみても意味が深いでしょう。また、散文文学の発展に寄与した点でも重要なものです。「土佐日記」は、一世に秀でた歌人であり人生の老巧な経験者でもある貫之が、文学史にさがけて試みた和文の日記であり、なかなか滋味深いものがあります。かげろふ・紫式部・更級の三日記はいずれも女流の筆になり、それ以前には見られなかった自照的、内省的な作品として登場し、それぞれに個性豊かに、彼女等の経験した実人生を語ってくれています。

これらの日記を通して、わたくしたちは、古代人の実際に経験した思惟や感情にふれ、またその見聞きした自然や人事を知ることができます。そして、こんなにも進歩した科学文明・物質文明の今の世にも、人間の心の機微は変わらず、これらの古代作品の中に脈打っている古代人の心は、今もなおそっくりわたくしたちの中にもあるという一面を感じずにはいられません。そして、なつかしくこれらの作品に親しみ、生き生きとこれを読むことができるのです。字句を正確に理解し、受験勉強にも役立てるとともに、これらの古典を、以上のような気持で楽しく現代に生かして勉強されることを、わたくしたち著者は望んでおります。

「土佐日記」と「更級日記」は、高等学校では多く読まれていますので、「かげろふ日記」「紫式部日記」より分量を多くとりました。収載の順序は、作品成立の時代順としました。難解な箇所も多く、現在考え得る範囲で解釈にとめました。今後、もっとよい解釈のできてくるものもあるかと思えます。紙面の関係などもあり、構文や研究の部分は長短不均一になったところもあります。いずれにしても、幾つかの例として掲げたにすぎませんから、各自でこれをふやして勉強していただければ、さらに効果を挙げることでしょう。また、構文は、違う考え方の成り立つ場

合もあると思います。絶対的なものではないことを念のために申し添えておきます。

三人の著者の分担は、土佐日記——伴久美、かげろふ日記・紫式部日記——関根慶子、更級日記——丸山キヨ子ですが、度々打合わせてできるだけ統一をはかるようにいたしました。それぞれに忙しい中で、終始三人が愉快に協力することができたのを嬉しく思っております。

思えば、この書の御依頼を受けたのは、去年の春ごろでしたでしょうか。公私とりまぎれ、何かと仕事がおくれがちになって、續文堂の森山光人氏にはいろいろと御迷惑をかけたことと思います。最後まで御寛恕下さったことをあらがたく存じます。

昭和三十四年十月

著 者

凡 例

一 本書は、主として、高等学校で古典教材として平安時代の日記を学ぶ生徒諸君のために、学習・受験向きの参考書として書いたものである。平安時代の日記文学作品、主要なものとして、「土佐日記」「かげろふ日記」「紫式部日記」「更級日記」の四者を収めた。ここに採択した章段は、大体において、現行国語教科書（甲・乙を含む）収載のものと、それに漏れた重要箇所を加えたものである。

二 本文 「土佐日記」の本文は、諸伝本の校合により複元し得る貫之自筆本に近いものに整理した。「かげろふ日記」の本文は、宮内庁書陵部蔵桂宮本を底本として、諸本を参考し、明らかに底本の誤脱と思われる所は改訂した。「紫式部日記」の本文は、群書類従本を底本として、諸本を参考し、明らかに底本の誤脱と思われる所は改訂した。「更級日記」の本文は、藤原定家自筆本を底本とし、明らかに底本の誤脱と思われる所は改訂した。全体によりやすいように適当に句読点をつけ、漢字はなるべく少なくし、適宜よみ仮名を施した。

三 章 段 学習の便宜上、適当に章段をきり、標題を付した。標題は、その章段の冒頭の文句を挙げたこともあり、またその章段の内容を端的に示すように掲げた場合もある。

四 読解の手びき 本文の読解にあたり、必要な予備知識、その文の前後関係、学習上のねらい、その文の要点などについて、一応の手がかりを与えようとしたものである。

五 校 異 本書の本文としたものと異なる本文も目にふれる場合の用意にその根拠を明らかにするため、ちがう本文を探ることにより解釈の相違を来たす場合のあることを示すため、底本の本文を改めた場合の底本文を示すため、などの必要から、校異欄を設けた。参照した諸本の略表記などについては、各作品解題の「諸本」の項に掲げている。

六 構 文 文章の構造を理解するための一つの手がかりとして示したものである。かかりうけの関係を示す「↓↑」の印は、このシリーズの「枕草子の研究」（佐伯梅友・石井茂氏著）にならって用いた。大筋のみを示した方がかえってわかりやすいと思われる所は、一本線「↓↑」のみを示し、また、細分して「↓↑↓↑↓↑↓↑」など、三本線くらいまでを示した所もあり、必ずしも一定していない。

七 口語訳 本文の一語一語をなるべく忠実に口語訳した。したがって直訳に過ぎてきこえない箇所も生じたが、原文と対照して

理解出来るようにつとめた。原文にない語を補った所は、なるべく（ ）に入れるようにした。

ハ語 釈 特に解説を必要とすると思われる語句、および文法上の説明、和歌の口語訳・解説などを「語釈」に入れた。解説に当たっては、従来の諸説なども挙げ、私見をも加えた。「参考」「余説」などは、主として「語釈」の補説である。

九鑑賞 各章段のあとに、その章段について考えるべき問題、作者の意図・人生観・自然観、文芸性、文学史上の評価などにつき、なるべく客観的態度で、著者の見解を述べた。その文章を味読・心読・理解するに、一つの手がかりとならんためである。諸君においても、また自由に、しかし妥当な鑑賞を試みられることを願う。

二研究 読解の程度を確かめ、整理して、知識を確実にする一端となるためである。この問題の解答またはそのヒントは巻末に付してある。各自、さらに問題を作り自問自答するもよからう。

二解題 各作品の最初に、その作品について必要な解説を記した。本文の理解に役立つことが多いと思われる、また、文学史上重要な知識ともなろうから、熟読されることを望む。

三索引 索引は、本文中の主要項目をとり出して、巻末に「人名索引」「和歌初句・引用詩歌索引」「一般語句索引」の三部に分類し、検索の便に資した。

目次

はしがき	一
凡例	三

土佐日記	九一六
------	-----

解題	一〇一六
----	------

作者(一〇) 書名(三) 成立(三)	
内容(三) 文章(六) 諸本(三)	
参考書(三) 旅程一覽(四) 関係地図(六)	

本文	二七一六
----	------

一 男もすなる日記といふものを	二七
二 廿二日に、和泉の国までと	元
三 廿三日、八木のやすのりといふ人	三〇
四 廿四日、講師、馬のはなむけしに	三三
五 廿六日、なほ守の館にて	三六
六 廿七日、大津より浦戸をさして	三六
七 廿八日、浦戸より漕ぎ出でて	四二
八 二日、なほ大湊に泊れり	四三
九 七日になりぬ。おなじ湊にあり	四四
一〇 八日、さはることありて	五一

二 九日のつとめて、大湊より	五
三 十日、今日はこの奈半の泊りに	五
三 十二日、雨降らず	三
四 十四日、暁より雨降れば	六
五 十七日、くもれる雲なくなりて	七
六 十八日、なほおなじ所にあり	六
七 廿日、昨日のやうなれば	七
八 廿一日、卯の時ばかりに	七
九 廿二日、よんべの泊より	九
一〇 廿三日、日、照りて	八
二 廿六日、まことにやあらむ	八
三 廿七日、風吹き波荒ければ	三
三 廿九日、舟出してゆく	五
四 卅日、雨風吹かず	八
五 二月一日、朝の間、雨降る	八
六 二日、雨風やまず	九
七 四日、楫とり、今日、風雲の	三

元 五日、今日からくして……………	五
元 六日、落標のもとより出でて……………	一〇二
三 七日、今日川尻に舟入り立ちて……………	一〇三
三 八日、なほ川上りになづみて……………	一〇四
かげろふ日記……………	一一七～一二二

解 題……………	一一八～一二四
----------	---------

作 者(二八) 書 名(二九) 成 立(一三〇)	
内 容(二〇) 諸 本(二三) 参考書(一三三)	
関係年表(三四)	

本 文……………	一二五～一七二
一身の上の日記……………	一三五

紫式部日記……………	一七三～二〇九
------------	---------

解 題……………	一七四～一八二
----------	---------

作 者(二四) 書 名(二七) 成 立(一七五)	
内 容(二六) 諸 本(二八) 参考書(一八二)	
かげろふ日記・紫式部日記関係系図(一八三)	

本 文……………	一八三～二〇九
一 秋のけはひの立つままに……………	一八三
二 五壇の御修法……………	一八六

三 九日、心もとなきに……………	一〇五
三 十日、さはることありて……………	一〇九
三 十二日、山崎にとまれり……………	一一〇
三 十六日、今日の夜さつきた……………	一一二
父の 出 立……………	一二七～一二二

二 父の 出 立……………	一二三
三 母 の 死(一一二)……………	一二四
四 かげろふのにき……………	一二四
五 道綱の元服……………	一二四
六 西山鳴滝ごもり(一一四)……………	一二七
七 物思ひの住みか……………	一二六
八 道綱を京へ……………	一二六
九 も が さ……………	一二九

三 道長・頼通寸景……………	一八八
四 皇子御出生……………	一九一
五 行幸近くなりぬとて……………	一九五
六 年く れ て……………	一九九
七 和泉式部・赤染衛門・清少納言……………	二〇〇
八 日本紀の御局……………	二〇四
九 仏 道 志 向……………	二〇七

更級日記

二二一～三三四

解題……………二二二～二二五

作者(三二) 書名(二六) 成立(二六)
 内容(三七) 文章(三九) 諸本(三〇)
 参考書(三三) 関係年表(三三) 関係地図(三四～五)

本文……………二二六～三三四

一 あづまの道のはて……………二二六
 ニ かどで……………二三〇
 三 まの……………二三三
 四 くろとの浜……………二三五
 五 まつさとの渡り……………二三六
 六 別れ……………二三九
 七 たけしげ(一～二)……………二四〇
 八 もろこしが原……………二四六
 九 足柄山……………二四七
 一〇 富士山……………二五二
 一一 富士川……………二五三
 一二 京へ……………二五五
 一三 物語を求めて……………二五七
 一四 まま母なりし人は……………二五九
 一五 乳母の死……………二六三
 一六 侍従大納言の御むすめ……………二六五

一七 源氏の五十余巻……………二六四
 一八 ねこ……………二七〇
 一九 萩の葉……………二七三
 二〇 火の事……………二七五
 二一 姉の死……………二七六
 二二 野べのさき原……………二七八
 二三 花・紅葉をながめて……………二八二
 二四 親、あづまに下る……………二八六
 二五 鏡の影……………二八九
 二六 西山(一～二)……………二九三
 二七 宮仕へ……………二九五
 二八 まづ一夜参る……………二九七
 二九 元師走になりて……………三〇〇
 三〇 里下り……………三〇三
 三一 その後は……………三〇五
 三二 春秋のこと(一～四)……………三〇五
 三三 石山まうで……………三〇七
 三四 頼む人の任官……………三〇九
 三五 人魂……………三一三
 三六 夢路にまどひて……………三一四
 三七 夢の世……………三七七
 三八 阿弥陀仏……………三九三
 三九 姥捨……………三九三

次 8	研究解答	二三五～三四四
-----	------	---------

目 索	土佐日記(三五)	かげろふ日記(三九)	紫式部日記(四〇)	更 日記(四一)	二四五～三五四
-----	----------	------------	-----------	----------	---------

人名索引(二)	和歌初句・引用詩歌索引(一二)	一般語句索引(二一〇)
---------	-----------------	-------------

参 考 図 録

割 籠(咒)	う ない(毛)	几	帳(二六)	女房装束(二九)	薬 師 仏(三一)	むらさき(三四)
寝殿造平面図(二四三)	ひたえのひさご(二四三)	鏡	(二九)	火	桶(三三)	狩 衣(三四)

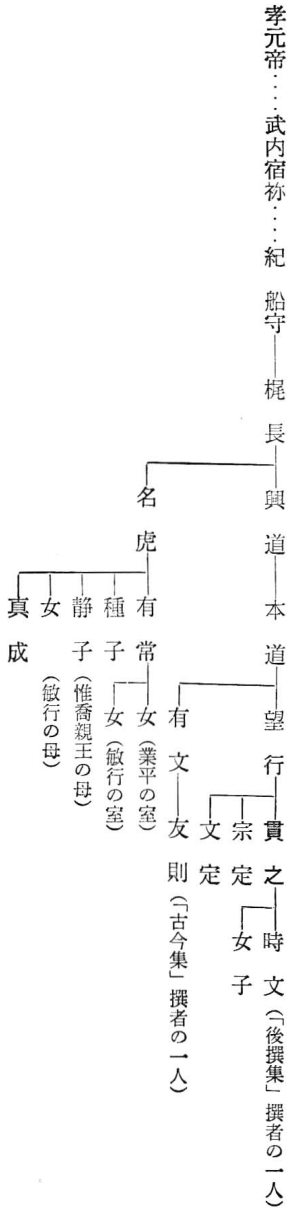
土佐日記

解題

一作者

「土佐日記」は、その冒頭に「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。」とあるが、女性の作というのは仮託で、実は紀貫之の書いたものであること、古来、何人も疑わないところである。すなわち、①貫之と面識があったかと思われる恵慶法師の自作歌集「恵慶集」に、「貫之が土佐の日記を絵に書けるを云々」とあること。②「後撰和歌集」（貫之の子、時文が、その撰者の一人に、「土佐日記」の中のいくつかの歌が、貫之作としてとられていること。③「貫之集」に、彼が延長八年土佐の国司に任ぜられて下国し、承平五年の春上京した事を記しており、「土佐日記」の内容とかなうこと。④「土佐日記」は一日として日次を欠かすことなく、官人男子のものとする日記の原態に近い形態をもっていること。⑤「土佐日記」の文体が、漢文訓読の用語や、中国の漢詩文に学んだと思われる対句的表現を用いていること、また所々にみえる歌に対する批評などによって、高度の教養を身につけた男性、貫之であろうと考えられること。以上の点をくつがえす反証がないので、貫之の作とする。

〔紀氏系図〕（確かな系図は明らかではないが、「群書類従」紀氏系図による）



この系図にも明らかなように、一族には詩文や歌にすぐれた人々を輩出させている。また名門紀氏は、名虎の女静子の生んだ惟喬親王が、藤原良房の女明子の生んだ惟仁親王に、立太子争いで敗れて以来、政治的不振も顕著となり、貫之の身边の人々も受領が多く、貫之も歌匠としては、当代一流の名声を拍していたが、官途では不遇であった。

貫之は、生年は諸説あつて明らかでないが貞観中頃と思われる。寛平御時后宮歌合(寛平五年883以前)に作者として加わるが、この時は二十歳前後であつたろうか。延喜五年(905)四月には、壮年にして御書所預として、紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑とともに「古今集」撰者の一人に撰ばれ、その仮名序を草している。これらは、彼が当代一流の歌人として認められていたことを物語るものである。一方、官途は、延喜六年(906)に越前権少掾同七年に内膳典膳十年に少内記、十三年に大内記、延長元年(928)に大監物、同七年に右京亮、同八年に土佐守に任ぜられ、承平四年(934)同地を出発、翌五年に帰京している。この頃、七十歳に近い年であらうか。(この帰路の記録が「土佐日記」である)。その後、天慶三年(940)、玄蕃頭、朱雀院の別当となり、同六年、従五位下となり、同八年(945)木工権頭となり、同年八月以降十月までの間に没したと思われる。八十歳に近い年であらうか。なお、土佐守の後、地方官として周防国に在任したこともあるらしい。

次に、貫之の仕事として、最も大きいものは何といつても歌よみとしての業績である。前にも述べたとおり、若くして歌合に加わり、「古今集」の撰者中の若輩にもかかわらず、序文を記していることは注目すべきことである。この仮名序で、彼の和歌に対する拘負をうかがうことが出来るが、いわゆる「古今調」(その歌風は、六朝の詩風を和歌の技巧に導入し、典雅な表現技法をもった主知的なものである)とよばれる、当代の風潮の中心にあつたのが貫之であつた。歌の実作家として、また歌学者として、わが国の和歌を、中国の詩と対等の位置まで高めた彼の役割は、文学史上画期的なものである。また、仮名の普及という点でもその功績は大きく、その筆蹟についても、「源氏物語」に「絵は巨勢のあふみ、手は紀貫之書けり。」とあるが、能書家でもあつたらしい。

なお、貫之の著作としては、「古今和歌集」二十巻とその「仮名序」および「土佐日記」のほかに、「大井川行幸和歌序」(延喜七年)「新撰和歌」四巻と序文(土佐在任中)、「天慶八年梁簡銘」(天慶二年貫之家歌合)(周防国司在任中か)、「三月三日紀師匠曲水宴和歌」(延喜五年以前)、「万葉五卷鈔」があり、また清水浜臣の「遊京漫録」に、貫之の「万葉抄合巻一冊」の名が見え、清輔の「袋草紙」

に、承平年間に、藤原忠平の催した子の日の和歌会の序を貫之が書いたという記事があり、「和歌深秘抄」に貫之著の「風土記」、「歌林四季物語」に「古今枕草」の名が見える。勅撰集の中にも貫之の多くの歌がみえるが、それらの主なものあげると、古今集一〇二、後撰集七八、拾遺集一〇九、新古今集三一、新勅撰集一四、続後撰集九、続古今集一六、玉葉集二六、続千載集五、などである。

二 書 名

現在では「土佐日記」と書いて「トサニッキ」と読むが、もとは「土左日記」と書き、「トサノニッキ」（または「トサノニッキ」）と読まれた。前田家藏定家写本の巻末には、貫之自筆本の説明があり、それに「土左日記」と題してあったことを伝えているのである。また、中古の仮名書きでは「にき」「にんき」となっている。当時、漢字音のつまる音は、発音しないで脱落させるか、または発音しても、その表記法がなく、無表記であることが多いので、「にき」の仮名書きの場合は、「ニキ」と読むか「ニッキ」と読むか解しがたいが、「にんき」とある場合は、子音のつまる音を「ん」で表記したものか、あるいは、はねて発音したものであろう。

なお、この書名について、中田祝夫博士は、「惠慶集」（前出参照）に「土佐の日記」とあることも考え合わせて「土佐守の日記」の意ではないか、と言われ、平安期の日記では「在五中将の日記」のように、日記中の人物の官職名が、やがてその人の呼び名となるから、土佐はつまり土佐守で、貫之をさし、「土佐守貫之の日記」と同義であったと言われる。そしてさらに、筆者を女性に仮託した作でも、その主題の人物が土佐守であれば、「土佐の日記」という名称は成立すると述べておられる（新註国文学叢書「土佐日記」）。また、小西甚一博士は、「貫之自筆本にこの題があったことは確かだが、貫之自身の案であったかどうかは不明で、私は、日記が流布した後の名ではないかと推測している。」と言われる（土佐日記評解）。

三 成 立

「土佐日記」の成立は、承平五年（九三五）か六年であろうか。貫之が土佐守を辞したのは承平四年である。この「土佐日記」は、

その門出、十二月二十一日から書きおこしているが、毎日の出来事を、その折々に書き記したものではないらしい。最初の書き出しの、「男もする日記といふものを云々」の言葉も読者を意識した、しかもある抱負をもった作者の言葉であり、文章も、簡潔であるが、整理され、洗練されたものである。また、小西甚一博士は、一月三十日の条に地名の錯誤があることを指摘して、やはり当日の記録と認めがたいことを述べておられる。すなわち、旅行中の簡単な控えをもとにして、帰京後しばらくして、まとめあげたものである。

なお、この「土佐日記」の成立ということは、この日記が、当時の男性がものした、実録、備忘的な、漢文または変体漢文の日記とは大いに異なり、仮名で書かれ、しかも文芸的作品であるという点において、仮名を公式に文学用語として登場させ、日記というものにも新生面を開き、当時成長しつつあった女流の日記文学に大いなる影響を与えたのであって、文学史上、占める位置は大きいのである。

四 内 容

この「土佐日記」は、すでに前項でも述べたとおり、同行する女の手をかりて、承平四年十二月二十一日に、貫之が、土佐の国司の任がとけて、帰京することとなる門出から書きおこされる。すなわち、国司の館のある国府から大津へ移り、二十七日に大津を出発、浦戸・大湊・奈半・室津とへて、阿波の鳴門と紀淡海峡を横断、大阪湾を浦づたいに淀川の川口まで北上、さらに淀川を溯行して承平五年二月十一日に山崎に到着、十六日、ようやくにして入洛帰郷という、旅の日記である。そしてこれは、土佐の国を去るに際しての、知人・友人の送別の事情や、途中の風光、旅の感慨、船中の出来事、などを備忘的に書き記したものととし、帰京後一段落して多少の暇が出来た頃に、構想をねり、まとめあげたものである。旅の感想の中では、任地で亡くした娘への想いが強くうちだされ、その他、親しい人々との別れの情や、海賊の恐怖などが描き出されている。また、彼のもつ歌に対する理念や作歌に対する心がまえ、といったものが、折々の歌の批評や、古歌の引用の場面に、彼独自の、自由潤達な筆で述べられているのである。そして、その文章の直截な美しさ、神経のゆきとどいた措辞、簡潔な言葉の中に秘められた豊かな感情、大らかな明るさ、上品なユーモ

アは、作者の文学者としての資質をよくあらわしている。したがって、これは単なる日記紀行文ではなくして、女に仮託した筆をもつて、特殊な表現効果をねらったこと、仮名文の普及をはかったこと、当時の文芸に新生面を開いたこと、歌に対する啓蒙的な手引きともなっていることなど、多くの問題をもつ作品である。

次に、この日記が、日次を欠かすことなく追っていて、官人男子のものする日記の原態によく似ていることは、一般日記文学として一括する作品中での形式的な特色ともなっているのである。すなわち、平安朝のいわゆる「日記文学」は、日次を追わなくとも、ある事件や行事の記録をすべて日記とよび、自叙伝風のものをも日記と呼んでいるのである。

この十二月二十一日の門出から、帰宅の翌年二月十六日に至る旅程の一覧は、二四～二五ページの別表に示す。ここでは、日記の内容として、注意すべきいくつかの個所を指摘しておこう。

(イ) 亡き娘への悲しみの情を述べているところ。

十二月二十七日 大津からいよいよ浦戸へ漕ぎ出す時。

一月十一日 羽根という所で、幼い女童が、かわいらしい質問をし、歌を詠むのを聞いて。

二月 四日 美しい貝や石を見て。

二月 五日 住吉のあたりを通って。

二月 九日 舟の泊りで、人々が子を抱き、降り乗りする様子を見て。

二月十六日 家に帰り、小松を見て。

(ロ) 貫之の歌論また作歌上の意見のあらわれているところ。(歌だけを記して、その批評、意見は省略する。)

一月 七日 「ゆくさきに立つ白波の声よりもおくれ泣かむわれやまさらむ」

「ゆく人もとまるも袖の涙川みぎはのみこそ濡れまさりけれ」

一月 九日 「見たせば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる」

一月十一日 「まことにて名に聞くとくころ羽根ならば飛ぶがごとくに都へもがな」